三島由紀夫「憂国」における「ズレ」

――一九三六年と一九六〇年の断絶と連続――

洪　潤杓

第一節　はじめに

一九六一年、『小説中央公論』冬季号に発表された三島由紀夫の「憂国」は、一九三六年二月二十六日に起った青年将校達の反乱事件である二・二六事件を背景にした短編小説である。三島由紀夫はこの「憂国」および「十日の菊」（一九六一）、さらには「英霊の声」（一九六六）を「二・二六事件三部作」と名付け、これら三つの作品は、後に『英霊の声』（河出書房新社、一九六六年六月）として出版されることになる。

「憂国」はこの三部作の中でもとくに重要な位置を占めている作品である。その理由としてはまず、「憂国」が最も早い時期に書かれた、という点が挙げられよう。第二に、この作品は、野坂幸弘が指摘したように「二・二六事件への傾斜において、著しい政治的尚武的志向の起点に自ら位置づけられ」[1]るという理由が挙げられる。

三島も自ら、「「花ざかりの森・憂国」解説」（一九六八）において、「憂国」の重要性に触れ、「憂国」は彼にとって「もっとも切実な問題を秘めたもの」と述べ、かつ、「もし、忙しい人が、三島の小説の中から一編だけ、三島のよいところ悪いところすべてを凝縮したエキスのような小説を読みたいと求めたら、「憂国」の一編を読んでもらえばよい」[2]とまで述べている。

さらに三島は、一九六五年に出版された『三島由紀夫短編全集』第六巻（講談社）の「あとがき」において、次のように語っている。

私の作品を今まで一度も読んだことのない読者でも、この「憂国」といふ短編一編を読んで下されば、私といふ小説家について、あやまりのない観念を持たれるだらうと想像する。そこには、小品ながら、私のすべてがこめられてゐるのである。[3]

以上のことから、三島が「憂国」に強い愛着を抱いていたこと、さらに、「憂国」が「二・二六事件三部作」を考察するさいに重要であるばかりか、三島文学の全体の道程を理解するさいにも重要な役割を果たすテキストである、という二点が確認できる。これ程までの愛着を持っていただけあって、三島本人による自作の解説や感想などは他の場所でも数多く見受けられる。

では、三島はこの作品の主題についてどう語っているのか。

「憂国」は、物語自体は単なる二・二六事件外伝であるが、ここに描かれた愛と死の光景、エロスと大義との完全な融合と相乗作用は、私がこの人生に期待する唯一の至福である。[4]

「「花ざかりの森・憂国」解説」の中の一節であるが、「憂国」というテキストにおいて主な軸をなしているのは、「愛」ここではすなわち「エロス」、「死」、「大義」という三つの要素であるということを示している。三島はまた、「二・二六事件と私」の中では、「「憂国」において、狙はずして自刃した人間の至福と美を描き」、「死に接した生の花火のような爆発を表現しようと試みた」[5]と述べている。これらのコメントをあわせて考えてみると、「憂国」における三島の意図は、「生」と「死」の融合する時の「至福」と「美」を描く、というところにあったと考えられる。

それでは、これまで他の研究者や評論家は「憂国」をどのように評価してきたのであろうか。

まず、江藤淳に触れなければならない。江藤は一九六〇年十二月二十日、朝日新聞紙上に「この短編はおそらく三島氏の作品のなかでも秀作の部類にはいるものであろう」と記し、「憂国」を高く評価した。江藤はまた、「三島氏が試みているのは、このような政治的異常時の中心をエロティシズムの側面からとらえようとすることで、その意図は見事に成功し

ている[6]」とのべ、三島自身によって後に述べられることになる「意図」を、すでに的確に捉えている。磯田光一も「殉教の美学」において「おそらく三島の作品の中で、「政治」と「エロス」との接点を定着した、最も完成した作品は『憂国』であろう[7]」と、江藤と似たような評価を下している。

松本道介は、「憂国」で作者が何を書きたかったのかといえば、若くて美しい男女の運命的な死の顛末であったろう。したがって主人公にはっきりした憂国の情があったかどうかはそれ程重要ではない[8]」という立場から、「憂国」という「大義」より、夫婦の「愛」に焦点を当てた評価を下している。松本はまた「作家が書きたかったのは、死の決意がかたまったあとの喜びと充実感[9]」であると指摘し、「憂国」という要素を完全に排除した、他の研究者とは一線を画す論を展開している。しかし松本は、「死」を前にしているからこそ高まる「喜び」であるという理由から、「生」と「死」を対比構造として捉えている点では、他の研究者と相通じているとも考えられる。

田坂昂もまた、この作品をエロティシズムと政治的思想とに関連づけて論じた一人である。田坂は「エロスの最高の燃焼と死の至福の不可欠の要件として、「大義」ということが、この作品ではじめてあらわれてきている[10]」と述べている。

清海健はこのような「憂国」の構造を三角形に例え、次のように指摘した。

> 死を頂点とし、にせの思想性と多様な文学性とを底辺の二点とする三角形に、「死」が人間の超越論的な不可解な部分としてあるなら「憂国」というテクストはその底辺にあるこの二極性から読まれるべきであり、私の考えでは「憂国」の構造を貫くのはそのような二極性である[11]

ここで三角形の両底辺を成している思想性と文学性という二点とは、それぞれ公的な領域に属する「大義や政治」と、個人の感受性の領域に属する「愛やエロス」を指示していると考えられる。また、「にせの思想性」とは、三島自らが政治にはあまり関心がなかったこと、そして、「憂国」というテキストは「思想性」とは深い関わりのないことを指しているだろう。「多様な文学性」とは、いかなる社会現象も形而上学的な観念の世界に変えてしまう、三島特有の語りの特色をあらわしていると考えられる。

以上、これまで様々な議論を検討してきたが、これらの議論を総合してみると、ある共通点を見出すことができる。そ

れは、多くの論が、大低「死」・「大義」（＝政治）・「エロス」といった三つの軸を中心として論じられてきたことである。しかし、いずれの論もテキスト、あるいは三島由紀夫という作家の枠内に限定して論じられているという欠点を有している。このことは、三島由紀夫自らが「愛と死の光景」、「エロスと大義との完全な融合と相乗作用」と自註自解したことと無関係ではないと考えられる。

これに対して本論文では、なぜ安保闘争の盛り上がった一九六〇年という時点で、一九三六年に起った二・二六事件について語った「憂国」というテキストが書かれたのかという疑問から出発して、「憂国」の軸をなしている「死」・「大義」・「エロス」という三つの要素をテキストの内部だけではなく、時代的コンテキストから考えてゆき、これまでの先行研究の欠点を発展的に解消してみたい。

第二節　二・二六事件に対する認識の〈ズレ〉

周知のとおり、二・二六事件は、特権階級を粛清したうえで天皇を奉じ、国家の改造を実現させるべき、という主張の青年将校が中心の皇道派と、陸軍の中央集権的統制を強化し、総力戦を行い得る国家を樹立すべき、という主張の高級将校中心の統制派との間における摩擦が原因となって、一九三六年に起ったクーデター事件である。

この事件が勃発した時、三島由紀夫は十一歳であった。当時三島は学習院初等科に通っており、事件は学校から近い所で発生したため、彼に強い印象を残したものと考えられる。山崎正夫によると、「学習院には、高級官僚、軍人の子弟が多い。天皇と、殺傷された「君側の奸」たちについて、さまざまな秘話が、一般庶民と違って、身近な人として、はるかになまなましく伝えられた[12]」という。すなわち、三島は事件と直接的な関係を持つことはないものの、学習院という地理的・心情的な距離の近接性のため、自分と密接な関係を有する事件として受け入れることが可能であったのである。それ故、作家となった後の三島は、数多くの文章でこの事件に触れている。三島はこの事件が彼に残した影響について、例えば次のように語っている。

たしかに二・二六事件の挫折によつて、何か偉大な神が死んだのだつた。当時十一歳の少年であつた私には、それ

はおぼろげに感じられただけだったが、二十歳の多感な年齢に敗戦に際会したとき、私はその折の神の死の怖ろしい残酷な実感が、十一歳の少年時代に直感したものと、どこかで密接につながってゐるらしいのを感じた。（中略）その純一無垢、その果敢、その若さ、その死、すべてが神話的英雄の原型に叶ってをり、かれらの挫折と死とが、かれらを言葉の真の意味におけるヒーローにしてゐた。[13]

三島は二・二六事件に参加した青年将校達を真の英雄と考える一方で、彼らの「純一無垢」、「果敢」、「若さ」、「死」が、神話的英雄のイメージを与えると考えた。三島はまた、敗戦の経験とともに青年将校を英雄視する考え方がより強くなったということを明確にしている。三島が敗戦の時に感じた「神の死の怖ろしい残酷な実感」という挫折感が、青年将校の挫折に投影され、青年将校の悲劇が三島自身と切り離すことのできない、神話的幻想として膠着したのであろう。いいかえれば、三島にとって青年将校達が英雄たり得たのは、彼らが失敗し、死んだからこそであったともいえよう。

それでは、はたして三島が認識していたように、二・二六事件は、青年将校らの英雄的な行動であったのか。そもそも二・二六事件の原因を、三島が言ったように、青年将校らの「純一無垢」、「果敢」、「若さ」だけに求めることができるのだろうか。

三島とは違う、別の観点から考えてみると、二・二六事件は、ごく現実的な利害関係の衝突に起因する側面が強かったといえる。当時の軍部における二つの対立軸であった統制派も皇道派も、国家の革新つまりは軍部中心の高度国防国家の建設を目指す点では同じだった。このように究極の目標が同じである限り、統制派と皇道派との区分はあまり意味がないともいえる。天皇親政をめざす精神主義の皇道派と、合理的な改造路線の統制派とは、単に改革を実現させるための方法が、あるいはそれぞれの掲げた標語が異なっていたに過ぎない。[14]

だとすればなぜ、統制派と皇道派とは、血を流すまで戦うことになったのか。数多くの研究が指摘しているとおり、その解答は、当時の軍部内の権力争いの中にある。

一九三二年まで、統制派と皇道派との区分は無く、国家主義者たちは、一夕会を中心とした初期皇道派を成しており、荒木貞夫を陸軍大臣に据えた後、初期皇道派は全盛期を迎える。しかし、荒木の相次ぐ政治的失策[15]で、彼らが目標としている国家革新運動が遠退くことになる。これに不満を感じた永田鉄山、東条英機、池田純久などが初期皇道派を離脱し、

永田を中心とした統制派が誕生した。両派が激しい抗争に入るのはこれ以後のことである。一九三四年、荒木は陸相を辞任し、森鉄十郎が陸軍大臣になり、続いて反皇道派の旗手の永田鉄山が軍務局長に就任することによって、政局に激しい変化が起きる。永田は人事異動の際、軍中央から皇道派を排除し、統制派の基盤を固めてゆく。こうして皇道派が追い詰められる中で、一九三五年には、皇道派の相沢三郎中佐による永田斬殺事件（相沢事件または永田事件）が生じた。以後、この事件の裁判を巡ってまたも激しい攻防が続くが、裁判は統制派の方に有利に進んだ。こうした情勢に耐えかねた皇道派の青年将校らが蜂起したのが二・二六事件である。

以上が権力争いの中で発生した二・二六事件の概略的な背景である。無論、二・二六事件の原動力は、自分達の理想を実現させようとする青年将校の意志や情熱であったと考えることも可能である。しかし、人事異動を巡る陸軍内の情勢変化からくる危機感がこの事件の最大の原因であったということは否定できない。この点を承認するなら、三島は、極度に現実的な理由に端を発した事件を、過度に感傷的に把握していた、という可能性が指摘できる。

では、二・二六事件に対するメディアや一般国民の反応はどうであったろうか。

事件が発生した日の午後、内務省、司法省、陸軍相などの権限で、事件、記事の内容によっては、新聞やラジオでの報道を許さない、という「記事差止め」の処置が一方的にとられた。[16] これは、当時軍部を掌握していた統制派が正確な情報を伝えることによって人心が動揺するのを恐れたためである。そのため新聞各紙は、軍部に対する批判はもちろんのこと、事件発生の原因等に関する論評も避け、事件発生直後は当局発表をそのまま掲載するのみであった。[17] 当時は当局による言論統制が行われた時代であったため、当時の新聞には反乱軍に同調するような記事は皆無であった。[18]

以下、事件が鎮圧された直後の新聞記事の内容を概観しておく。

東京日日新聞の一九三六年三月三日付には「殉職警官の遺族へ集まる旋風的同情」という題名の記事が掲載された。これは、市民たちが、事件鎮圧時に殉職した警察官の遺族に多額の寄付金を送っている、という内容を伝えるものである。ほぼ同じ内容の記事が三月四日付の東京日日新聞に「失業者まで金一封」というタイトルで、また、三月六日付の読売新聞の「可憐な手紙に添へ少女から弔慰金」というタイトルで掲載されている。そして、東京日日新聞三月十六日付の「殉職警官を偲んで」という記事、さらには東京朝日新聞三月十七日付の「昂揚する警察精神」という記事は、いずれも殉職警官を追悼する内容である。このように、事件を鎮圧した側に一方的に肩入れする記事は、他にも例を挙げるときりがない。

一方、事件当時の知識人による評価も、青年将校に有利ではなかった。河合栄治郎は、一九三六年に『中央公論』に発表した「時局に対して志を言ふ」という一文の中で「二・二六事件は近来の日本に於て、最も吾々を震撼したる大事件であつた。今や此の事件に対する国民の批判は、明白に否定的であることに略々決定したかの如くである、殊に特別議会の開院式の勅語は、厳乎として否定的態度を確立せしめたと思ふ」とした上で、次のように述べている。

二・二六事件の本質は二つある、第一は一部少数のものが暴力の行使により政権を左右せんとしたことに於て、それがファシズムの運動だということであり、第二はその暴力行使した一部少数のものが、一般市民に非ずして軍隊だと云ふことに在る。[29]

自由主義者であった河合栄治郎は、当時のメディアを操っていた陸軍側とは見解を異にしており、一九三八年には著書が発禁となるなど、当局から弾圧を受けた人物である。このような反政府的な知識人にとっても、二・二六事件は批判の対象であった。河合栄治郎は二・二六事件に、失敗したクーデターという観点からではなく、その帝国主義的な性格に注目した。それ故、彼は二・二六事件をファシズムの運動であると規定し、その暴力的性格を批判したのである。

当時の知識人からも批判された二・二六事件は、戦争が終わり、戦後民主主義が定着していく過程に書かれた歴史書においても批判の対象であった。上の河合栄治郎の例からも見られるように、主に二・二六事件のファシズム的な性格が批判されるようになったのである。しかも、事件当時は、当局の検閲のため、ファシズムに対する批判は控えめにならざるを得なかったが、戦後になってからは、より辛辣な批判が展開されるようになったのである。

戦後の代表的なマルクス主義歴史家である井上清と鈴木正四の共著で、一九五七年に発刊された『日本現代史』には、二・二六事件について次のように書かれている。

かれらは陸軍省、首相官邸などを占領し、その要求八項目[29]を陸軍大臣に提出した。それは「維新回転」をおこない、「ソ国を威圧」し、彼らの派閥に地位をあたえ、反対派を逮捕またはやめさせよ、という立身出世の要求だけであった。青年将校たちは、五・一五事件以来、はげしいことばで財閥を攻撃し、農村の惨状を説き、農民をすくえと主張

していたが、大規模な反乱までおこしたときの彼らの要求や行動には、財閥攻撃も農民救済も全然なかった。彼らのいう「維新」とは、皇道派軍部の独裁と戦争体制をつくること以外のなにものでもなかった。[21]

三島由紀夫における二・二六事件の青年将校のイメージとは正反対ともいえる程、この一節には多大な見解の差が見られる。実際、彼らの八項目の要求を見ると、天皇に対する忠誠心よりは、自分たちの立身出世のための蹶起のように見える。そして、彼らが標榜してきた「農民を救え」という言葉は、ただの標語に過ぎず、実は外国への膨張政策を露わにしていることが分かる。

もちろん三島も同時代の歴史認識と、自分の認識との食い違いといった状況を正確に把握していた。「二・二六事件について」で彼は次のように述べている。

もつとも通俗的普遍的な二・二六事件観は、今にいたるまで、次のやうなジャーナリストの一行に要約される。「二・二六事件によつて軍部ファッショへの道がひらかれ、日本は暗い谷間の時代にはいりました」[22]

ここで三島は、二・二六事件に対する一般的な認識には同意しない、という自らの立場を明らかにしている。さらに、「二・二六事件について」のなかには、次のような記述もある。

二・二六事件を肯定するか否定するか、といふ質問をされたら、私は躊躇なく肯定する立場に立つ者であることは、前々から明らかにしてゐるが、その判断は、日本の知識人においては、象徴的な意味を持つてゐる。すなはち、自由主義も社会民主主義者も社会主義者も、いや、国家社会主義者ですら、「二・二六事件の否定」といふところに、自分たちの免罪符を求めてゐるからである。この事件を肯定したら、まことに厄介なことになるのだ。現在只今の政治事象についてすら、孤立した判断を下しつづけなければならぬ役割を負ふからである。[23]

右の引用から分かるように、三島は二・二六事件に対して、マルクス主義的歴史観に代表される同時代の歴史認識と、

また、多くの同時代の知識人とは、全く異なった歴史観を有していたのである。このことは、三島の作家活動において非常に重要な意味を持っている。三島にとって、それは時代に対する抵抗意識の現れであり、文学作品の創作のモチーフになるからである。三島は歴史や現実の問題を既存の歴史認識や理性的推論に基づくのではなく、形而上学的に理解し、それを架空の世界に表現してきた。すなわち、彼は、二・二六事件に正当な評価が下されてないという、現実世界への不満を虚構の世界において解消しているのである。

以上、考察を進めてきたとおり、「二・二六事件」についての一般的な認識と、三島自身の認識との間には大きな〈ズレ〉が存在した。そして、この〈ズレ〉こそが、三島が「憂国」という作品を書く原動力になった、というのが本論の立場である。

それでは、三島はその〈ズレ〉を解消するために、どのような虚構世界を構築したのであろうか。それを考察する前にまず、「憂国」の背景になる一九三六年と、「憂国」の創作時点である一九六〇年とがどのように相応しているのかを検討しなくてはならない。なぜかというと、一九六〇年に一九三六年のことを書かなければならなかった状況を考察することにより、「憂国」、あるいはそれ以後の「二・二六事件三部作」が、単なる三島の思想を表す作品ではなく、三島の認識によっていわばろ過された、様々な同時代的要素が集約されたテキストである、ということが明らかになるからである。

第三節　一九六〇年代の政治的・文化的環境

三島由紀夫の「憂国」は、最後の部分に「一九六〇、一〇、一六」と日付が付いていることから、脱稿した日付がわかる。この節では、一九六〇年という時点で、なぜ二十四年前の二・二六事件を書くようになったのかについて考察したい。

一九五九年から盛りあがりをみせていた安保闘争だが、一九六〇年五月十九日、自民党はついに衆議院に警官隊を導入、単独で新安保条約を強行採決し、安保闘争は燎原の火のように、全国的に広がった。五月二十日には、全学連が首相官邸になだれこみ、警官隊と衝突し、六月十日には、ハガチー事件が起こった。六月十五日には、学生約七千人が国会に突入、警官隊、右翼団体と流血の乱闘、東大生の樺美智子が死亡する事件が起こり、闘争はより激しくなり、絶頂に至ることになった。六月十八日には参加する市民の数が増え、三十三万人が国会デモ、徹夜で国会を包囲する事態に至った。しかし、

こういった猛烈な反対にもかかわらず、六月十九日には、新安保条約・協定が自然承認されることになる。

以上のような安保闘争の最中で、三島はただ事態の推移を見守っていた。そして、一九六〇年六月二十五日には、『毎日新聞』に「一つの政治的意見」という文を寄せたのである。

私はこのごろ、請願デモを見、ハガチー・デモの翌日の米大使館前における右翼デモを見、六月十八日夜には、安保条約自然承認の情景を国会前で見た。私は自慢ぢゃないが一度もデモに参加したことはなく、これはあくまで一人のヤジ馬の政治的意見である。いま発表されてゐる政治的意見は、すべて何らかの意味で「参加者」の意見である。一人くらゐヤジ馬の意見があつてもよからう。[24]

ここで、三島は、あくまでも傍観者的な立場を保っていることを主張しながらも、「参加者の意見」を縮小しようとしている。三島は、同じく「一つの政治的意見」において、岸信介首相の官邸を取り囲んだデモ群衆について、「「岸が何となくきらひ」で、デモに参加してゐる人は多からう。ところが「岸が何となくきらひ」といふ心理は、容易に「だれそれが何となく好き」といふ心理に移行する。来るべき総選挙に、私はかうした皮膚感的投票の増加するのをおそれる」[25]といい、デモ参加の意味を単純化している。

そして、ここで述べている「来るべき総選挙」とは、一九六〇年十月二十四日のいわゆる「安保解散」により、十一月二十日に行われた衆議院議員総選挙を指すのであろう。ここで注目すべきことは、三島が総選挙の結果を気にしていたという点である。結果は、保守の自民党が議席を増やし、好成績を挙げたが、三島が「一つの政治的意見」を毎日新聞に寄稿した六月二十五日には、安保闘争を通して革新陣営が力を得ていた時期であり、予想できなかったことであった。[26]

千種キムラ・スティーブンは、「二・二六事件の青年将校たちは日本が「左翼思想等によつて浸食され」ていると懸念し、特に「二月二十日の総選挙に於て、国民の多数が、ファッシズムへの反対と、ファッシズムに対する防波堤としての岡田内閣の擁護とを主張し」「無産党」も進出したことに危機感をいだき、決起したことである」[27]と指摘し、総選挙の結果に対しての危惧を二・二六事件の原因の一つとして挙げている。こういった点においても、一九三六年と一九六〇年は照応しているのである。

一方、安保闘争が社共両党、総評、全学連などの左翼勢力によって主導されたため、共産主義革命が起こるという危機感が現実味を帯びるようになり、この時期を境に全愛会議、三曜会、青思会などの連合体をはじめ、日本国粋会、大日本国民党、日本青年連盟、日の丸青年隊など行動右翼団体が組織され、ビラまきや、演説やデモの妨害活動を展開した。[28]

一九六〇年十月十二日には、東京の日比谷公会堂で行われた三党首大演説会で、演説中であった浅沼社会党委員長が、突然演壇にかけあがった若い男に、刺殺される事件が起こった。犯人は十七歳の山口二矢で、現場で逮捕されたが、十一月二日、刑務所で自殺した。

大江健三郎はこの事件からモチーフを得て、「セヴンティーン」を一九六一年一月に『文学界』に発表し、その続編である「政治少年死す」を一九六一年二月に同じ『文学界』に発表したが、後者は右翼団体などから猛烈な抗議を受け、その後の刊行本に収録されていない。

一方、深沢七郎は『中央公論』一九六〇年十二月号に「風流夢譚」を発表したが、この小説は、日本に「左欲革命」[29]が起き、天皇一家が革命軍に襲われ、殺害されるという夢の話である。ここで描かれている天皇一家の殺害場面が問題とされ、右翼団体から激しい抗議を受けるようになった。結局、一九六一年二月一日、「風流夢譚」を掲載した中央公論社の嶋中鵬二社長邸に、元大日本愛国党員の小森一孝（当時十七歳）が無断で上りこみ、家政婦を殺し、社長夫人に重傷を負わせた「嶋中事件」が起こり、中央公論社は「風流夢譚」を掲載したことについて謝罪記事を出すことになった。

このように、三島由紀夫の「憂国」と全く同じ時期に、「天皇」・「愛国」に関する主題を扱う「セヴンティーン」、「政治少年死す」、「風流夢譚」などの問題作が発表されたことは、非常に意味深い。安保闘争を経て「天皇」・「国家」に対する観念が再構築され、文学の場でもそれらが新たな形で表象されることになったのである。

また、安保闘争の時期に「今までの型にはまった運動方式でなくて、自分たちで考えた運動方式」を目指し、江藤淳・浅利慶太・石原慎太郎・大江健三郎・開高健・武満徹・寺山修司・谷川俊太郎など、若手の芸術家や作家が集まった「若い日本の会」が組織されたこと[30]を見ても、いかに当時の文学者が安保闘争に積極的にかかわっていったかという事実がわかる。

一九六〇年に安保闘争を皮切りに、政治的問題で日本中が大騒ぎになった一方、戦後には「性の解放」ともいえる劇的な変化が見えてくる。戦後の性言説の変化を概略してみると一九四六年には『完全なる結婚』が出版され、ベスト・セ

ラーになる。[31] 一九四九年には雑誌『夫婦生活』が創刊され、性にかかわる記事に接しやすくなる。一九五〇年にはD・H・ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』の訳書が出版され、一九五二年には『チャタレイ夫人の恋人』の翻訳が東京地裁で有罪判決を受け、また、一九五七年には最高裁で有罪判決が確定するが、この裁判に対し、文芸家協会が抗議声明書を発表することになる。一方、一九五五年には石原慎太郎の『太陽の季節』が芥川賞を受賞し、全国的に太陽族が流行することになった。一九五六年には売春防止法が成立し、一九五八年に売春防止法が施行されることになったが、この法の実施はむしろ、自由意志の恋愛が主になる現象を招いたのである。その結果、見合い結婚より恋愛結婚が増加することになった。[32] 三島も『婦人公論』一九六〇年四月号の「巻頭言」において、早婚の原因の一つとして売春禁止法を挙げている。[33]

そして、安保条約の自然成立した日から、わずかに一週間後である一九六〇年六月二十五日に『性生活の知恵』初版が出版されたが、初版発行からわずか二年半で一〇〇万部を超える大ベストセラーとして話題になった。[34]

安保闘争という巨大な政治的流れに並行して、このような「性の解放」や「恋愛意識の変化」などといったごく私的領域ともいえる所での動きがあった、ということは注目に値する。

上野昂志は、大江健三郎の「セブンティーン」と三島由紀夫の「憂国」の共通点を「エロスと暴力あるいは死を媒介してある種の「超越性」に至る道筋を描いたこと」[35]であると指摘しているが、両作品とも、相反しているように見える暴力や死を同伴する「政治」の領域と、「性」という領域との結合を表現していると見受けられる。

それでは、三島由紀夫は「政治」と「性」との絡み合いを「憂国」においてどのように表現しているのであろうか。それについては第五節で詳細に考察するが、ここでは、簡単に三島由紀夫の「エロティシズム」の捉え方だけを簡単に触れておこう。

三島由紀夫は「二・二六事件と私」において、「直接にはこの確信（至福の死）にこそ、私の戦争体験の核があり、又、戦争中に読んだニーチェ体験があり、さらに又、あの「エロティスムのニーチェ」ともいふべき哲学者ジョルジュ・バタイユへの共感があつた」と述べ、「『エロティシスム』書評」においては、バタイユの『エロチシズム』の内容について、次のように記している。

まづ、生の本質は非連続性にあるという前提から出発する。固体分裂は、分裂した個々の非連続性をはじめるのみ

であるが、生殖の瞬間のみ、非連続の生物に活が入れられ、連続性の幻影が垣間見られる。しかるに存在の連続性とは死である。かくてエロチシズムと死とは、深く相結んでゐる。「エロチシズム」とは、われわれの生の、非連続的形態の解体である。[36]

右の引用によると、三島由紀夫の共感する「エロティシズム」とは、「生」の「非連続性」を解体し、「連続性」を付与するものである。また、「連続性」という側面からみると、「エロティシズム」は「死」と密接な関わりがあると述べている。三島が「二・二六事件と私」で「昭和の歴史は敗戦によつて完全に前期後期にわけられたが、そこを連続して生きてきた私には、自分の連続性の根拠と、論理的一貫性の根拠を、どうしても探り出さなければならない欲求が生まれてきてゐた」[37]と述べたことと合わせて考えてみると、三島にとって、「連続」という概念は、生の意義を支持してくれる重要な哲学原理をなしていることがわかる。ここから、「エロティシズム」が「個々」の非連続性だけではなく、「戦前」と「戦後」といった歴史的「断絶」の解体にも繋がる可能性が見えてくる。三島は続いて「私は私のエステティックを掘り下げるにつれ、その底に天皇制の岩盤がわだかまつてゐることを知らねばならなかつた」と述べ、「自分の連続性の根拠と、論理的一貫性の根拠」を天皇制から探ろうとする姿勢を明らかにしている。すなわち、三島は、断絶された歴史の連続性を「天皇制」から、個々の連続性を「エロティシズム」と「死」から見つけようとしたのである。「天皇制」、「エロティシズム」、「死」は、「連続性」という点で相通じ、三島において「エロティシズム」が「政治」といった問題と結合せざるをえない必然性は、「連続」という概念から端を発しているのであろう。

以上のように、三島由紀夫は、自分は政治に興味がないと述べ、実際に現実の問題を彼特有の観念の世界に埋め込む傾向を持っていたとはいえ、常に安保闘争の推移に興味を持ち、その感想を新聞や雑誌に寄稿してきたのである。そして、一九六〇年の状況が、一九三六年の状況と照応していると捉え、安保闘争期に、二・二六事件を喚起させる「憂国」を発表したのである。また、戦後成長期を迎えた日本社会に、性観念における劇的な変化が現れた時期に、「連続性」といった彼特有の「エロティシズム」の解釈を通して、「政治」と「エロティシズム」とが融合する美意識を描こうと試みたのである。このような時代の動きの中で発表された「憂国」は実に時宜適切であったといえよう。

第四節　「憂国」における「死」の意味変化

第二節で考察したように、三島において「二・二六事件の青年将校」たちは、クーデターに失敗したからこそ、またその失敗によって死んだからこそ最高に美しい存在になったといえる。であるからこそ、三島は、二・二六事件の青年将校に対する他の人々との認識の〈ズレ〉を解消するために、彼らの「死」の意味を説明しなければならなかったといえる。ここでは、二・二六事件の青年将校の「死」と照応する、武山中尉夫婦の「死」を意味を探ることにより、三島の夢見た「英雄の死」を浮き彫りにする。

武山中尉は二・二六事件の勃発以降、親友が反乱軍に加入したことに「二日にわたる永い懊悩」を重ねる。この二日という期間は二つの点において重要な意味を持つ。第一は、物語を歴史的事実と呼応させることによって、その客観性を保持している点である。三島は「二・二六事件と私」において「もしもう一晩待てば、皇軍相撃の事態は未然に防がれ、武山中尉にはかつての同志の一人として、たとへ司直の手は伸びても、このやうな死の必然性は薄れたにちがひない」と述べている。歴史的に武山中尉が心配したような皇軍相撃の事態は起きておらず、事件三日後、反乱軍は無血鎮圧されたからである。第二は死を決意するまでの悩みを表しているという点である。武山中尉は事件発生の日、集合ラッパの音を聞いて、家を出ていく。ならば、武山中尉は事件の全貌をすぐに理解したはずであるが、苦悩した結果、自決を決意するまで二日が経過したということである。この間、武山中尉のなかに「大義」、「生」、「死」の三者の間の葛藤が浮かんできたに違いない。

武山中尉が決断するまで、相当の苦悩があったが、その決断は麗子婦人によって固められていく。中尉は家に帰ってきて、「二日にわたる永い懊悩の果てに、我家で美しい妻の顔と対座してゐるとき、はじめて心の安らぎを覚え」たのである。そして、中尉は麗子に「俺は今夜腹を切る」と自分の決意を伝え、麗子は躊躇なく「お供をする」と答える。二人の喜びは「あまり自然にお互ひの胸に湧き上がつたので、見交はした顔が自然に微笑」む。最後の情事を前にした中尉の感情をテキストは次のように語っている。

彼が今待つてゐるのは死なのか、狂ほしい感覚の喜びなのか、そこのところが重複して、あたかも肉の欲望が死に向

つてゐるやうにも感じられる。いづれにしろ、中尉はこれほどまで渾身の自由を味はつたことはなかつた。（二三四）

これは「死」の感覚と「生」の感覚が混じりあい、「肉の欲望」（＝性欲）が「死」と絡み合うさまが表れているところである。「まだどこにも兆してゐない死苦が、感覚を灼けた鉄のやうに真赤に鍛へてくれるのを感じた。まだ感じられない死苦、この遠い死苦は、彼らの快感を精練したのである」（二三五）と語られているように、「死」と最後の営みの「快感」とは、お互いに煽り出しながら、上昇させている。武山中尉の「至福」は「死」に直面しているからこそ、また、「死」の苦痛があるからこそ感じられる喜びなのである。

このように武山中尉の「死」は、前に触れた、三島においての理想的な「エロティシズム」に他ならないが、武山中尉が麗子に「俺の切腹を見届けてもらひたい」（二三〇頁）と要求する所、武山中尉が麗子の裸体を見て「いささか利己的な気持ちから、この美しい肉体の崩壊の有様を見ないですむ幸せを喜んだ」（二三六）といった所からもわかるように、甘えるような中尉の性格の一端も伺われ、「英雄の死」としては不完全であると見受けられる。

中尉の感情には悩みが現れているのに対して、麗子の場合は悩みなく最初から決心している。麗子はラジオのニュースを聞き、良人の親友の名が蹶起の人たちの中に入っているのを知って、それを死のニュースだと思う。麗子の決心は最初から固く、さらに武山中尉の決心まで固めていく役割をするものの、「死」を前にした悲しさがあちこち見出される。麗子は遺書を書くために墨を磨る時、「言はうやうのない暗さ」を感じたのである。そして、武山中尉が切腹を始める直前には、「涙で化粧を崩したくないと思つても、涙を禦めることができな」くなる。このように「死」についてマイナスのイメージを持っていた麗子の観念の変化は、武山中尉との関係の変化から読みとることができる。

武山中尉は麗子にとって「全世界の太陽」であった。そして、麗子は武山中尉に「一度だつて口ごたへ」もしない程、何事でも夫に従う女性であった。「こんな自分の子供らしい愛着のはるか彼方に、良人が体現してゐる太陽のやうな大義を仰ぎ見た」という記述から分かるように、麗子は「大義」を自分から遠いところにあると考え、夫を介してのみ「大義」を仰ぎ見ることができたのである。それまで一方的に武山中尉に従順であった麗子は、武山中尉との一体感を感じていたが、しかし彼女は武山中尉の「死」の瞬間にはある種の距離感を感じることになる。

苦痛は麗子の目の前で、麗子の身を引き裂かれるやうな悲嘆にはかかはりなく、夏の太陽のやうに輝いてゐる。その苦痛がますます背丈を増す。伸び上る。良人がすでに別の世界の人になつて、その全存在を苦痛に還元され、手をのばしても触れられない苦痛の檻の囚人になつたのを麗子は感じる。しかも麗子は痛まない。悲嘆は痛まない。それを思ふと、麗子は自分と良人との間に、何者かが無情な高い硝子の壁をたててしまつたやうな気がした。(二四五)

このように武山中尉の「死」によって、夫婦は「生」と「死」という異なる世界に置かれることになるのである。麗子にとっては結婚以降、初めて味わう距離感である。夫の「死」がきっかけになって麗子の「死」についての観念に重要な変化が起こる。武山中尉が死んだ後、麗子は非常に冷静になって、長い時間化粧をする。この化粧はすでに「良人のための化粧ではな」く、「残された世界のための化粧で、彼女の刷毛には壮大なものがこも」っていた。「死」、「夫」、そして「大義」についての全ての観念が一瞬のうちに変容をきたすのである。この変化は次のように現れている。

麗子は遅疑しなかつた。さつきあれほど死んでゆく良人と自分を隔てた苦痛が、今度は自分のものになると思ふと、良人のすでに領有してゐる世界に加はることの喜びがあるだけである。苦しんでゐる良人の顔には、はじめて見る何か不可解なものがあつた。今度は自分がその謎を解くのである。麗子は良人の信じた大義の本当の苦味と甘味を、今こそ自分も味はへるといふ気がする。今まで良人を通じて辛うじて味はつてきたものを、今度はまぎれもない自分の舌で味はふのである。(二四九)

ここで「死」は喜びに変わり、それまで「夫」を介して間接的に感じてきた「大義」を麗子が直接に味わうに至るのである。こうした意識の変化は「憂国」というテキストの中で肝心な意味を内包している。マイナスのイメージであった「死」のイメージの転換が麗子の意識の中で完成しているからである。また、この作品の主な対立軸がここで試みに融合されているからである。「憂国」のこのような「生」と「死」の逆説について磯田光一は次のように語っている。

「生」は「死」に限定されることによって、いっそうその輝きを増すのであり、「充実した生」とは「充実した死」

の異名にほかならない。それは「死」が「祝祭」と化する事態であり、人は『憂国』のなかにそのような「死」の完璧な姿を見るであろう。[39]

つまり、「憂国」には、「充実した生」は「充実した死」と通じるという逆説性が麗子の意識の中に見出される。美しい死が麗子の意識の中で完成するということは、武山中尉の意志だけでは「死」の完璧な姿が完成されないということの反証に他ならない。麗子夫人がいたからこそ、武山中尉が自決の決断を固め、至福の死を成し遂げられたといえよう。

第五節　「憂国」における「大義」と「エロティシズム」との融合

第三節で「憂国」の発表当時の政治的・文化的環境と三島の反応について触れたとおり、大きく見るとそこには、安保闘争と性の解放という二つの現象が現れている。すなわち、前者は政治的・公的領域であり、後者は非政治的・私的領域であるといえよう。このような一九六〇年の時代状況の中で、三島は時宜適切に「憂国」を発表し、全く異なる次元に見える「政治」と「性」の問題を融合しようと試みたのである。

前にも言及したように、政治の季節とも言える激変の時代状況下で発表された小説に付けられた「憂国」というタイトルはごく自然であると考えられる。しかし、テキスト内の世界は、「憂国」とは関係ないように見える。このことは武山中尉の自刃の理由を語った次の対話からはっきり分かる。

「おそらく明日にも勅命が下るだらう。奴等は反乱軍の汚名を着るだらう。俺は部下を指揮して奴らを討たねばならん。……俺にはできん。そんなことはできん」

「俺は今警備の交代を命じられて、今夜一晩帰宅を許されたのだ。明日の朝はきつと、奴らを討ちに出かけなければならんのだ。おれにはそんなことはできんぞ、麗子」（二二九）

つまり、武山中尉の「死」の直接的な原因は、親友が反乱軍に加入したという点にある。これはあくまでも個人的なこ

とであり、国を憂えるということとは程遠い。「皇軍万歳」と書いた武山中尉の遺書だけが、彼の死を「大義」のための「死」であるとする唯一の根拠ではあるが、全体的に考えてみると、これを「国のための死」だと判断するための根拠は貧弱であるといわざるを得ない。

それでは、麗子の「死」はどうであろうか。麗子の場合は、武山中尉の「死」より、はるかに個人的な「死」である。麗子はひたすら夫に従う人であり、自決の理由も夫君の跡を追うためである。しかも、麗子の遺書も両親に先立つ不孝を詫び、「軍人の妻として来るべき日が参りました」という内容のものである。

こうしてみると、夫婦の「死」には、「公」的な要素は非常に弱く、「私」的な性格が強い。「死」を前にした「最後の営み」も「大義」が与える「喜び」ではなく、非常に個人的な「喜び」である。一見したところでは、武山中尉夫婦の「死」は「憂国」というタイトルに相応しくない「死」であるように見える。

「憂国」という題名と内容とが食い違うということは、これまで数多くの研究者によって指摘されてきた。松本健一は「『憂国』の青年将校がどのような政治的思想、いいかえると志の内容をもっているかは、深く追求される必要はない[39]」と述べている。『憂国』に描かれている武山中尉夫婦の姿は、非政治的な姿であるからである。松本道介は、小説『憂国』を「よく読んでみれば、舞台が二・二六事件というだけで、思想的にはなんの関係もないことがわかる」としたうえで、「読者が「憂国」という表題から思い浮かべるような憂国の情はいささかももたない、或る意味で能天気とさえいえる軍人なのであった[40]」と述べている。そして、磯田光一は『憂国』において「三島氏の関心が、この青年将校の信じた思想の内容というよりむしろ思想への自己滅却から生まれる〝死の美的完結性〟にあったことは、疑いを容れない[41]」と語っている。また、野坂幸弘も「二・二六事件とそれに関わる「憂国の至情」なるものが、ごく僅かにしか描かれていないように見える[42]」と指摘している。

しかし、「憂国」というタイトルは、何かの手違いでついてしまったものでは、断じてない。「憂国」が創作された一九六〇年の政治的状況をみると、三島は、左翼の台頭を懸念し、来るべき総選挙の結果も気にかけていたのである。ただ、三島は現実の問題を「憂国」というテキストで観念的に構築したのである。その結果このテキストは絶えず「エロスと大義との完全な融合と相乗作用」に向かっていき、「憂国」という言葉で表現される「大義」は、このテキストにおいて欠かせない一つの軸として機能しているのである。大義とエロスとの融合の鍵となるものは、次の引用から見出すことがで

きる。

麗子の体は白く厳かで、盛り上がつた乳房は、いかにも力強い拒否の潔らかさを示しながら、一旦受け入れたあとでは、それが暫の温かさを湛へた。かれらは床の中でも怖ろしいほど、厳粛なほどまじめだつた。おひおひ烈しくなる狂態のさなかでもまじめだつた。（中略）

これらのことはすべて道徳的であり、教育勅語の「夫婦相和シ」の訓へにも叶つてゐた。麗子は一度だつて口ごたへはせず、中尉も妻を叱るべき理由を何も見出さなかつた。陛下の神棚には皇太神宮の御礼と共に、天皇皇后両陛下の御真影が飾られ、朝毎に、出勤前の中尉は妻と共に、神棚の下で深く頭を垂れた。挙げる水は毎朝汲み直され、榊はいつもつややかに新しかつた。この世はすべて厳粛な神威に守られ、しかもすみずみまで身も慄へるやうな快楽に溢れてゐた。（二二五―二二六）

上の引用は日常の夫婦関係を描写する箇所であるが、夫婦官能のエロティシズムが「教育勅語」の「夫婦相和シ」の公的領域の訓えという枠内にからめとられているのがわかる。こうした記述は現在の観点からみると、一見滑稽さが感じられる所ではあるが、小説の背景になる一九三六年の状況を考えると単に滑稽だけではすまされないということがよくわかる。

「教育勅語」が発布されたのは、一八九〇年十月三十日で、その時から「教育基本法」の公布される一九四七年三月まで、日本帝国の教育の指導理念として掲げられ、五七年間教育の全般にわたって絶大な影響を与えてきた。[43] 一九三〇年代に入ってからは、政府が戦時体制にあわせて、子供に対する軍国主義教育を強化する方針を取ることになる。[44]

また、千種キムラ・スティーブンは「教育勅語」の内容について次のように記している。

「勅語」には儒教的な、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和しといった一般受けしやすい儒教的道徳が説かれている。しかしこの勅語の特徴は、それらの徳が、天皇の「忠良ノ臣民」となるためのものであるという新しい天皇中心の価値観に収斂されていることである。そして「臣民」の最高の義務は、「皇運ヲ扶翼スヘシ」となっている。[45]

すなわち、「教育勅語」は、父母、兄弟、夫婦の間の私的生活の領域を、「天皇」という公的領域に包み込む働きを担っているのである。いうまでもなく、「教育勅語」の教育を受けており、また、熱烈な天皇崇拝者であった二・二六事件の青年将校にとっては、「教育勅語」は、相当の威厳を持っていたということが推測できる。

以上の考察をふまえるならば、「憂国」において、非政治的・個人的な要素を秘めた夫婦生活を公的な領域下に置きなおすことは、矛盾を抱え込んだまま、「大義」と「エロティシズム」との間の〈ズレ〉を結合しようとする試みであるということがわかる。すなわち、「憂国」においては、「教育勅語」を媒介にして、「大義」と「エロティシズム」が融合しているのである。

二人が死を決めたときのあの喜びに、いささかも不純なもののないことに中尉は自身があつた。あのとき二人は、もちろんそれとはつきり意識はしてゐないが、ふたたび余人の知らぬ二人の正当な快楽が、大義と神威に、一分の隙もない完全な道徳にまもられたのを感じたのである。二人が目を見交はして、お互ひの目のなかに正当な死を見出したとき、ふたたび彼らは何者も破ることのできない鉄壁に包まれ、他人の一指も触れることのできない美と正義に鎧はれたのを感じたのである。中尉はだから、自分の肉の欲望と憂国の至情のあひだに、何らの矛盾や撞着をみないばかりか、むしろそれを一つのものと考へることさへできた。(二三二)

右の引用は武山中尉夫婦が自決を決意し、最後の夫婦の情事をする前の中尉の考えを描写した一節であるが、ここでも夫婦の間で行われる私的な行為が「憂国の至情」と融合させられているのである。「彼らは何者も破ることのできない鉄壁に包まれ」ているという一文は、前の引用の「この世はすべて厳粛な神威に守られ」ているという一文に照応している。すなわち、一九三六年の「教育勅語」と一九六〇年の「憂国」とは、私的領域が公的領域により掬い取られる形で、合一と融合の作用が働いていることで照応しているのである。

ならば、「憂国」は、「教育勅語」のように、「公」的原理が「私」的領域を包み込むという美意識を表象していると考えられる。そして、一九六一年の「憂国」は、一九三六年の「教育勅語」と照応するテキストとして読むことができるであろう。

但し、「教育勅語」が、公的原理が先にあって、その公的原理が私的生活を規制するのに対し、「憂国」は夫婦愛という私的領域から出発し、私的領域が「大儀」という公的領域に繋がっているのである。

第六節　おわりに

本論はこれまで、三島由紀夫にとって「二・二六事件」が持つ意味、一九六〇年代の政治的・文化的環境、また、小説「憂国」に現れている「死」の意味、さらには、「憂国」における「大義」と「エロティシズム」との融合、という四つの点について考察してきた。

二・二六事件の青年将校たちの意図、思想、要求など政治的側面からみると、彼らを「美しい」存在として見ることはおそらく不可能であろう。事件当時の襲撃についても、青年将校たちの残虐さが批判[16]される程であったが、三島は青年将校に対して「純一無垢」、「果敢」、「若さ」といった、自ら作り上げた英雄のイメージだけを持ち続けたのである。

事件当時のメディアも、同時代の知識人も、戦後の歴史家も、ほとんどが、二・二六事件に対して否定的評価を下したが、三島はこういった評価に不満を感じざるを得なかったのである。

そういう不満を持っていた中、一九六〇年に全国に広がる安保闘争が起こり、左右の対立が極限に至ることになる。三島由紀夫が「政治とは無縁の反俗的な芸術至上主義者」であり、「安保騒動についても無関心に近かった[17]」とはいえ、安保闘争についての意見を新聞や雑誌に寄せ、左翼の台頭を懸念し、まもなく来る総選挙の結果も気にしていたのである。三島は、このような一九六〇年の政治的状況が、二・二六事件の勃発した一九三六年と照応していると捉えたに違いない。一九三六年も、一九六〇年も、「天皇」や「愛国」や「国民」といった概念が盛んに問われた時期であり、左右翼の対立、様々なテロ事件、総選挙があったことなどが相通じているからである。こういう状況の下で、「憂国」が発表されるに至ったのである。

三島は『三島由紀夫短編全集』第六巻の「あとがき」において「徹頭徹尾、自分の脳裏から生まれ、言葉によってその世界を実現した作品は、『憂国』一編ということになる[18]」と語っている。「言葉によってその世界を実現」するというのは、一九六〇年の状況、一九三六年の二・二六事件に対する世間の認識など、現実に対する不満及び欲求が、「憂国」という、

言葉による世界が構築されるきっかけとなったことを示唆する。

一方、安保闘争の最中にも、『性生活の知恵』が出版され、大ベストセラーになるなど、政治的動向とは距離のあるような「性の解放」というべき現象が現れた。三島は「連続性」という観念の下で、「エロス」を「死」と結びつける、特有の美意識を創出し、これを虚構の世界で構築していったのである。

三島が「憂国」において描こうとした「エロスと大義との完全な融合と相乗作用」は、「教育勅語」を媒介として構築されている。すなわち「大義」と「エロティシズム」との融合であるが、一九三六年の「教育勅語」と一九六〇年の「憂国」とが照応しながら、公的領域の「大義」と私的領域の「エロティシズム」といった相反する要素が結合しているのである。これは、「公」と「私」の断絶を埋め、「連続性」を与える。

すなわち、「憂国」において、「大義」、「エロティシズム」、「死」の融合は、個々の断絶、歴史の断絶、「公」と「私」の断絶を克服し、「連続性」を保たせる美意識であろう。

注

本論に引用されている本文は『三島由紀夫全集13』（新潮社）によるものである。

(1) 野坂幸弘「『憂国』」『国文学解釈と鑑賞』、至文堂、二〇〇〇年十一月号、一〇七頁
(2) 三島由紀夫「花ざかりの森・憂国」解説」『三島由紀夫全集33』、新潮社、四三八～四三九頁
(3) 三島由紀夫「あとがき」『三島由紀夫全集32』、新潮社、二〇頁
(4) 三島由紀夫「花ざかりの森・憂国」解説」『三島由紀夫全集33』、新潮社、四三九頁
(5) 三島由紀夫「二・二六事件と私」『三島由紀夫全集32』、新潮社、三六七頁（初出―『英霊の声』、河出書房新社、一九六六年六月）
(6) 江藤淳「エロスと政治の作品―三島、大江が共通の主題」『朝日新聞』、一九六〇年十二月二十日
(7) 磯田光一「殉教の美学」『文芸春秋』、一九六四年二月～四月号（『磯田光一著作集1』、小沢書店、一九九〇、四三頁から引用）
(8) 松本道介「『憂国』」『国文学解釈と鑑賞』、至文堂、一九九二年九月号、八九頁
(9) 松本道介「三島由紀夫というドラマ」『国文学解釈と鑑賞』、至文堂、二〇〇〇年十一月号、四二頁
(10) 田坂昂『三島由紀夫論』風濤社、一九七〇、二二八頁
(11) 青海健「眼差しの物語、あるいは物語への眼差し―三島由紀夫『憂国』論」『群像』、講談社、一九九〇年七月号、一五六頁
(12) 山崎正夫『三島由紀夫における男色と天皇制』、海燕書房、一九七八、二三頁

(13) 三島由紀夫「二・二六事件と私」(『三島由紀夫全集32』、新潮社)、三六一頁
(14) 北博昭『二・二六事件全検証』、朝日新聞社、二〇〇三、三一～三二頁参照
(15) 具体的にいえば、一九三三年の陸軍充實革新案と農村の救済予算案の失敗。特に当時、農村は兵力供給源であったため、農村の救済予算案の失敗は、皇道派青年将校においてその意味が大きかった。(同上、二四～二五頁参照)
(16) 高橋正衛『二・二六事件―「昭和維新の思想と行動」増補改版』、中公新書、一九九四、五頁参照
(17) 『二・二六事件と日本のマスメディア』、慶応義塾大学法学部政治学科玉井清研究会編、一九九四、四～九頁
(18) 二・二六事件 關連の新聞記事は、『二・二六事件と日本のマスメディア』(慶応義塾大学法学部政治学科玉井清研究会編、一九九四) から参照した。
(19) 河合栄治郎「時局に対して志を言ふ」『中央公論』、一九三六年六月号、七頁
(20) 二・二六事件の青年将校たちの要求八項目は次のようであった。
一、このクーデターを維新廻転にみちびくこと。決起の趣旨を天皇につたえること。
二、皇軍相撃をなくすこと。つまり反乱軍を鎮圧しないこと。
三、宇垣ら反対派を逮捕すること。
四、統制派幹部を罷免すること。
五、「ソ国威圧のため」に荒木大将を関東軍司令官にすること。
六、各地の皇道派将校を中央に招き、役をあたえること。
七、反乱軍を現在の位置におくこと。
八、在京の彼らのなかまをすぐ陸相官邸によんで相談すること。
井上清・鈴木正四『日本近代史』、合同出版社、一九五七、三八〇頁から引用
(21) 同上、三八〇頁
(22) 三島由紀夫「二・二六事件について」『三島由紀夫全集33』、新潮社、一七三頁
(23) 同上、一七三頁
(24) 三島由紀夫「一つの政治的意見」『三島由紀夫全集29』、新潮社、五二〇頁
(25) 同上
(26) 白鳥令『保守体制 (上)』、東洋経済新報社、八五～九一頁、西平重喜『日本の選挙』、至誠堂、七七～九二頁参照
(27) 千種キムラ・スティーブン『三島由紀夫とテロルの倫理』、作品社、二〇〇四、一二八頁。さらに、千種キムラ・スティーブンは、同書において、三島が安保闘争を見て、日本に「共産主義革命」が起こるのを恐れたことについて詳細に論じている。「憂国」の執筆のモチーフについては、「神格天皇制を復活させれば、共産主義の脅威から日本を守ることができると考え」、「神格天皇を復活させるための活動の第

一歩として「憂国」を書いた」と述べているが、一九六〇年という時点に書かれた「憂国」において「神格天皇の再生」の意識が表れているかどうかには疑問が残る。（千種キムラ・スティーブン『三島由紀夫とテロルの倫理』、作品社、二〇〇四、一一九～一二九頁参照。）

(28) 一九六〇年に起こった右翼団体による主要な事件だけを挙げてみても、一九六〇年三月六日の三井三池闘争衝突事件、三月十四日の浅沼社会党書記長暴行事件、四月二日の毎日新聞社衝撃事件、六月四日の安保阻止デモ暴行事件、六月十五日の維新行動隊突入事件、六月十七日の河上社会党代議士刺傷事件などがある。（猪野健治『日本の右翼』、日新報道、一九七三、三三四頁）

(29) 深沢七郎は「風流夢譚」において、左翼革命を連想させる「左欲革命」という言葉を使った。

(30) 小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』、新曜社、二〇〇二、五一六頁

(31) 敗戦後に大きな影響を与えた性科学書。あまりにも人気があったため、次々と『完全なる愛情』『完全なる日本人夫婦の結婚生活』『完全なる夫婦の生活』『完全なる結婚生活』などの亜流が出版された。（山本幸正「敗戦後と「性の解放」」（『昭和文学研究』、昭和文学会、二〇〇四年三月、六二～六五頁）

(32) 歴史学研究会『日本同時代史3　五五年体制と安保闘争』、青木書店、一九九〇、二五一頁

(33) 三島由紀夫「巻頭言」『三島由紀夫全集29』、新潮社、四二二頁

(34) 上野昂志『肉体の時代』、現代書館、一九八九、一〇八頁

(35) 同上、一六頁

(36) 三島由紀夫「「エロチシズム」――書評」『三島由紀夫全集29』、新潮社、五〇一頁（初出―『声』、一九六〇年四月）

(37) 三島由紀夫「二・二六事件と私」『三島由紀夫全集32』、新潮社、三六五頁

(38) 磯田光一「エロチシズムと造型意志」『磯田光一著作集1』、小沢書店、一九九〇、八二頁

(39) 松本健一「恋愛の政治学――『憂国』と『英霊の声』」『国文学解釈と教材の研究』、学燈社、一九八六年七月号、八三頁

(40) 松本道介「三島由紀夫というドラマ」『国文学解釈と鑑賞』、至文堂、二〇〇〇年十一月号、四二頁

(41) 磯田光一「戦後的反逆の美学」『磯田光一著作集1』、小沢書店、一九九〇、九三頁

(42) 野坂幸弘「『憂国』」『国文学解釈と鑑賞』、至文堂、二〇〇〇年十一月号、一〇六頁

(43) 片山清一『資料・教育勅語』、高陵社書店、一九七四、三頁

(44) 千種キムラ・スティーブン『三島由紀夫とテロルの倫理』、作品社、二〇〇四、七八頁

(45) 同上、七六頁

(46) 山崎正夫『三島由紀夫における男色と天皇制』、海燕書房、一九七八、二三頁

(47) 船木拓生『富士の気分』、西田書店、二〇〇〇、五九頁

(48) 三島由紀夫「あとがき」『三島由紀夫全集32』、二〇頁